



一致のたとえ

暗唱 聖句

「体は一つでも、多くの部分から成り、体のすべての部分の数は多くても、体は一つであるように、キリストの場合も同様である」
(Iコリント 12：12、新共同訳)

「からだ一つであっても肢体は多くあり、また、からだのすべての肢体が多くあっても、からだは一つであるように、キリストの場合も同様である」
(Iコリント 12：12、口語訳)

今週の 聖句

Iペトロ 2：9、出エジプト記 19：5、6、エフェソ 2：19～22、
Iコリント 3：16、17、Iコリント 12：12～26、
ヨハネ 10：1～11、詩編 23 編

安息日 午後 11/3

今週のテーマ

聖書を学んだことのある人ならだれもが知っているように、聖書は、たとえや象徴にあふれており、そのたとえや象徴は、それら自身よりも重要な現実（存在）を指し示しています。例えば、聖書の犠牲制度全体の本質は、ある意味で、はるかに重要な現実、つまりイエスと救済計画全体を象徴しています。

ほかにもさまざまな種類のたとえが聖書では用いられていますが、時として、それらは最も基本的な要素（例えば、水、火、風など）です。文脈に応じて、それらは、霊的、神学的真理のたとえになります。例えば、「風は思いのままに吹く。あなたはその音を聞いても、それがどこから来て、どこへ行くかを知らない。霊から生まれた者も皆そのとおりである」(ヨハ 3：8) とイエスがおっしゃったとき、その風は聖霊の象徴として用いられていました。

聖書は、私たちが教会の中に見出すような一致、この世に明示しなさいと神から命じられている一致を表現するためにいくつものたとえを用いています。それぞれのたとえは、それ自体は完全ではありません。そうではなく、これらのたとえは全体として、教会の一致（例えば、教会と神との関係、教会員同士の関係、教会と地域社会との関係）についていろいろなことを明らかにしているのです。

今週の研究は、そのようなたとえのいくつかと、それらが教会の一致について明らかにしていることに目を向けます。

Iペトロ2:9、出エジプト記19:5、6、申命記4:20、7:6を読んでください。教会とは人にほかなりませんが、その人はだれでも構わないわけではありません。教会とは、神の民、神に属する人たち、神を自分の父、救い主だと主張する人たち、キリストによって贖あがなわれた人たち、キリストに服従する人たちのことです。このたとえは、神が救済計画を導入されて以来、地上に一つの民を持ってこられたこと、旧約聖書のイスラエルと新約聖書の教会の間には連続性があることを強調しています。アダム、大洪水前後の族長たち、そしてアブラハムの時代から、神は御自分の民と契約を結んでこられました。彼らが、この世に対する神の愛、憐れみ、正義の代表者になるという契約です。

神の民は、「選ばれた民」「王の系統を引く祭司」「聖なる国民」と呼ばれています。これらの言葉は、彼らが特別な目的、つまり「あなたがたを暗闇の中から驚くべき光の中へと招き入れてくださった方の力ある業を、あなたがたが広く伝える」（Iペト2:9）ために、取りのけられていることを示唆します。このことは、出エジプト記34:6、7に描かれているような神の恵み深い御品性の描写とも相通じています。「神は御自分の特別な所有物として教会を手に入れられた。教会員が彼らの生活によって神の貴重な御品性の特質を反映し、すべての人に神の恵みと慈しみを宣べ伝えるためである」（『SDA聖書註解』第7巻562ページ、英文）。

申命記7:6～8を読んでください。今日、（教会のもう一つのたとえである）「聖なる国民」という名称に値するのはどの国だろうか、私たちは自問するかもしれません。が、そのような国はありません。あらゆる国民も民族も、神の愛と恵みに値しない人々によって構成されています。そして聖書は、私たちが聖なる民と呼んでいます。同時に、イスラエルを選び、設立したことは、まったく神の愛に基づくのであって、人間が神に携え行くことのできるどんな功績によるのでもない、とも教えています。神の民の形成は、愛情深い創造の行為であり、（国民的規模での罪と背教にもかかわらず）神はアブラハムに対する約束——彼の子孫、つまりキリストによって神が御自分の民を救うであろうという約束——を守られました。神の民の選びが神の恵みの行為であったように、彼らの救済も神の恵みの行為です。この主題は、身に余る神の恵みという私たちの共通の根を思い起こさせてくれます。

◆ 救いは、キリストが私たちのためにしてくださったことに基づくのであり、私たちができることに基づくものではありません。私たちが「神の民」であるとして、なぜ私たちは常にこの真理を念頭に置いていなければならないのですか。

新約聖書における神の民のもう一つのたとえは、神の家、あるいは神の家族です。これは、教会内における込み入った相互依存の人間関係を強調する石や建物のたとえで、ペトロはクリスチャンを「生きた石」(Iペト2:5)と呼んでいます。このたとえには、永続性や堅実性といった性質も含まれます。

エフェソ2:19～22を読んでください。この箇所において、パウロは教会の二つのたとえを結びつけています。一つは動かないもので、家または建物。もう一つは生きているもので、人間の家族です。

一つの石それ自身には、さしたる価値はありませんが、それがほか多くの石と組んで積まれるとき、人生の嵐に耐えることのできる構造物になります。いずれのクリスチャンも一つの石でいることはできず、神の家族の交わりの中で他者と関係しなければなりません。また、堅固な建物となるために、それはしっかりした基礎に支えられねばなりません。イエス・キリストがその基礎、神の家の「隅の親石」(Iコリ3:11も参照)です。教会は、キリストを活動の隅の親石としなければ、消滅するでしょう。教会とはまさにイエス・キリスト(彼の人生、死、復活、帰還)に関わるものです。教会は、イエスに関する良き知らせをこの世に伝えるために一致する信者の共同体を形成します。教会の関心事はイエス(彼が何者であり、私たちのために、また私たちの内に何をしてくださり、彼を救い主として受け入れる者に何を提供してくださるか)なのです。

家族のたとえにも、非常に深い意味があります。このたとえは、人々が互いに持つ関係に基づいています。それは、父や母、兄弟や姉妹といったなじみ深いたとえです。家族の構成員間の絆は強くなりえますし、それに伴う忠誠心は、しばしば外部とのあらゆる結びつきに勝ります。忠誠心は一致の重要な部分です。なぜなら、どのような一致であれ、忠誠心がなければ存在しえないからです。

このたとえは、教会とどのように関係しているのでしょうか。教会員は一つの大家族の一員でもあります。私たちは結びついています。共通の祖先であるアダムを通して人類に属しているからだけでなく、「新しく生まれる」という共通の経験を通して第二のアダムであられるイエスと結びついているからです。このように私たちは、共有する教理的真理のゆえだけでなく、イエスにあって新しい命を持つ魂に回心した体験のゆえに、互いに結びつくのです。

◆ 不幸にも、すべての人が家族とのすばらしい体験をするわけではありません。このたとえは、彼らには大きな意味がないかもしれません。しかし、教会として、どうしたらこれらの人たちが体験したことのない家族になれるのでしょうか。

パウロが用いるもう一つの建物のたとえは、神の神殿、あるいは聖霊の神殿というたとえです。これは、高価で立派な建物のたとえです。人間の個人の体を聖霊の神殿と呼んでいるIコリント6:19とともに、パウロはIコリント3:16、17でこのたとえを用いて、古代中東の最も聖く、最も貴重な大建造物である神の宮を指しています。

Iコリント3:16、17を読んでください。明らかにパウロは、教会への言及の中で、肉体の神殿や神の住みかを思い描いているわけではありません。英語と違い、新約聖書のギリシア語は、「あなた」(単数形)と「あなたがた」(複数形)を区別します。ここでは複数形なので、このたとえは集合体を指しているのです。コリントのクリスチャンは、全体で聖霊の神殿を形作っており、霊的意味において、神は彼らの間に住まわれるのです。

パウロにとって、神はクリスチャンの交わりの中に住まわれます。それゆえ、この交わりを破壊しようとする者はだれであれ、裁きの結果に苦しむであろうと、彼は警告しています。この交わりの中心、神がこの神殿に内在されることの中心にあるのが信者の一致です。この聖句は、肉体を大事にするという意味でしばしば用いられますが(言うまでもなく、クリスチャンはそうすべきですが)、それは、パウロがここで主張しようとしていた要点ではありません。そうではなく、彼のメッセージは、教会の一致を破壊する者たちに対する警告だったのです。

パウロはこの章の前のほうで、彼が一致にとっての課題だと思うことに言及しています——「お互いの間にねたみや争いが絶えない以上」(Iコリ3:3)と。このような態度や振る舞いは、クリスチャンの一致にとって現実の脅威であり、神が御自分の神殿からいなくなられる原因となります。それゆえ、パウロは教会員に、教会の一致を脅かす態度や振る舞いを捨てるように望んでいます。

教会内で対立が生じるとき、コリントの信徒へのパウロの助言は、今日でも適用可能です——「さて、兄弟たち、わたしたちの主イエス・キリストの名によってあなたがたに勧告します。皆、勝手なことを言わず、仲たがいせず、心を一つにし思いを一つにして、固く結び合いなさい」(Iコリ1:10)。

◆ **ねたみや争い**——こういったものは、パウロの時代にだけ、教会が直面した問題ではありません。私たちは今日でもそれらに直面します。私たちの一致を脅かさない形でこれらの問題を解決しようと努めることにおいて、私たちはそれぞれどのような役割を担っていますか。

恐らく最もよく知られている教会のたとえであり、さまざまな部分から成る教会の一致を最もはっきり示しているたとえは、キリストの体でしょう。「体は一つでも、多くの部分から成り、体のすべての部分の数は多くても、体は一つであるように、キリストの場合も同様である。……あなたがたはキリストの体であり、また、一人一人はその部分です」(Iコリ12:12、27)。

Iコリント12:12～26を読んでください。Iコリント12章におけるパウロの教えは、本物のクリスチャンの一致が単に多様性の中に存在するのではなく、また多様性にもかかわらず存在するのでもなく、むしろ多様性のゆえに存在するという深遠な現実を伝えています。このような多様性のあらわれの源が聖霊であることに、私たちは驚くべきではありません。ちょうど人間の体が信じがたいほど一体化しており、驚くほど多様であるように、キリストの体も理想的にはそうであり、そのような多様性を通して、キリストの体の完全性と豊かさをあらわすのです。

このたとえは、教会としての私たちに直接語りかけてきます。過去数十年、セブンスデー・アドベンチスト教会は急成長してきました。セブンスデー・アドベンチスト教会は、考えられうるほぼすべての背景、文化、環境からの出身者で構成されています。私たちの民族的、人種的、文化的、教育的、年齢的違いによって、キリストにある私たちが分裂してはなりません。それどころか、この多様性は、一致のための原動力として聖霊によって成形されるべきです。そして、こういった違いにもかかわらず、私たちがキリストにおいて一つであるという真理を明らかにするのです。

すでに触れたように、私たちが何者であり、どこの出身であるかといったことに関係なく、十字架の下において私たちはみな平等です。私たちの周囲の世界がますます分裂しているので、教会は、多様性の中の一致が実現可能であることを実証しなければなりません。神の民は、福音のいやしと和解の力を実際に示すことができます。

驚くべきことに、パウロは、いかにこの理想が実現できるかを語っています。「キリストが教会の頭であり、自らその体の救い主……です」(エフェ5:23)。「御子はその体である教会の頭です」(コロ1:18)。信者1人ひとりが霊的にキリストと結ばれているので、全身は同じ食べ物によって栄養を得ます。ですから、私たちは、聖書の研究の重要性、御言葉の中で学んだことに従うことの重要性、キリストの体における一致のために礼拝し、祈るという共通体験の重要性をいくら強調してもしすぎることはありません。

ヨハネ 10:1～11 と詩編 23 編を読んでください。大都市の多い現代世界では、どんな種類の動物であれ、牧畜の様子を見ることが極めてまれになりました。ほとんどの人は、羊と羊飼いの関係について、今やほとんど知りません。しかし、イエスがこのたとえ話を語られたとき、人々はその話をよく理解できました。イエスが、「わたしは良い羊飼である」と言われたとき、人々は即座に、それが詩編 23:1 の「主は羊飼」への言及だと気づき、理解したのです。このたとえは明瞭であったばかりか、それを鮮明なものにする感情的価値にもあふれていました。古代の近東文化において、また今日の中東においてもなお、羊飼いは、困難にもかかわらず、献身的に自分の羊の世話をすることで知られています。羊飼いのたとえ話は、神の御品性と、神とその民との関係を描くために聖書で用いられる大切なたとえの一つになりました。

羊としての神の民のたとえは、興味深いです。羊に対して私たちがしばしば抱く一つの印象は、無害で無防備といったものです。それゆえに羊は、保護と導きのために良い羊飼いを頼りにします。率直に言って、羊は愚かだと見られています。時折、うっかりして羊は道に迷うので、羊飼いは彼らを捜し、群れに連れ戻すのです。若い羊は、しばしば担いで運ばれたり、格別な世話をされたりする必要があるありました。忍耐と理解が羊を世話するのに必要でした。いろいろな意味で、これは教会をあらわすための完璧なたとえです。羊飼いとの関係において、教会員には恐れるものが何もなく、あるのは得るものだけです。

イエスはこのたとえ話の中で、羊が羊飼いの声に耳を傾けることの重要性も強調なさいました。状況的に必要であれば、いくつかの羊の群れを同じ囲いの中に入れることによって守ることがありました。その後、どうしたら羊たちを分けることができるのでしょうか。羊飼いに必要なのは、囲いの入口に立って呼ぶことだけです。羊たちは羊飼いの声を聞き分け、彼のもとへやって来るからです。「自分の羊をすべて連れ出すと、先頭に立って行く。羊はその声を知っているの、ついて行く」(ヨハ 10:4)。羊飼いの声に耳を傾けることは、教会にとって極めて重要です。実際、神の民の一致と安全は、羊飼いの近くにいることにかかっており、彼らが彼の声に従うことと直接関係しているのです。

◆ 人々は一般的に、自分が羊として描かれることを好みません。それにもかかわらず、羊というのは、私たちにとってなぜささいなのですか。私たちが羊飼いを必要とすること、彼の声に従う必要があることについて、このたとえから何を学ぶべきですか。

参考資料として、『各時代の希望』中巻第52章を読んでください。

「あちこちで見かけるギリシア・ローマ風の建造物同様、エルサレムの神殿に関連して、新約聖書の著者たちは神殿のたとえを用いた。信者たちが、教会の神聖さ、教会を設立し育てる神の役割、キリストと“霊”の働きの決定的な特徴、教会内における教会員の連帯といったものを思い描けるようにするためである。建造物が建てられている場所は、静的イメージを暗示するように思えるかもしれない。しかしこのたとえは、生物学的修辭表現とともに用いられ、建設の過程がしばしば強調されている。『私たちは完成した建造物よりも、建設の過程の物語を思い描かねばならないと感じるのだ』。教会は、その生活と物語の中で、『生ける神の神殿』（Ⅱコリ6：16）を謙虚に認めるといふ驚くべき特権を与えられている」（ジョン・マクベイ『聖書における教会のたとえ』〈アンヘル・M・ロドリゲス編『教会のメッセージ、使命、一致』収載）52ページ、英文）。

話し合いのための質問

- ① 聖書における教会のたとえを思い返してください。あなたはどのたとえが一番好きですか。なぜそれにひかれるのでしょうか。教会のたとえは、ほかにもいくつか次の聖句の中にあります（Ⅰテモ3：15、Ⅱテモ2：3～5、Ⅰペト2：9）。これらのたとえは、教会についてほかにどんなことを教えていますか。
- ② 日曜日の研究は、「神の民」であるにもかかわらず、私たちは自分の功績ではなく、神の救済の恵みにのみ頼らなければならない、と強調していました。それどころか、私たちを「神の民」とするのは、まさに神の救済の功績に信頼することだ、と主張することができないでしょうか。これは、なぜ妥当な主張なのですか。あるいは、なぜ妥当な主張ではないのですか。

まとめ

新約聖書は、教会の性質や使命をあらわすためにさまざまなたとえを用いています。さらに重要なことに、これらのたとえは、神が注意深く御自分の民を見守っておられ、保護してくださることを教えています。これらのたとえはまた、神の民が分かちがたく結びついており、私たちが、行うようにと召された働きをするために互いを必要とすることも教えているのです。